

『菅原伝授手習鑑』：人間をより高い存在とより劣った存在に序列化することが

人々に与える傷を暴きだす

2006年4月20日に大阪の国立文楽劇場で『菅原伝授手習鑑』を観て

エヴリン・ゲルダ・リンドナー（心理学博士、医学博士）

文楽は、おそらく世界の人形劇の中でもっとも発達した形態であり、ユネスコから世界無形遺産の認定を受けている。私は2006年4月20日に大阪の国立文楽劇場で『菅原伝授手習鑑』を観た。

文楽の語り手（大夫）が感情を伝えるやり方は、心理学的視点から見て他に例をみないもので、非常に教育的である。「邪悪な笑い」があり、深い悲しみや絶望が、激しいまでに感動的に伝えられる。ある大夫は81歳で「重要無形文化財保持者」だった。

『菅原伝授手習鑑』は次のような歴史的な文脈における叙事詩である。菅原道真（劇の中では菅丞相として知られている）は宮廷の大臣であり、優れた書家で学者でもあった。しかし政争により遠い九州に放逐され、彼はその地で生涯を閉じる。道真の死後、一連の災害が都を襲う。それは彼の怒れる靈魂のせいであるとされ、彼を天神として知られる神に祀り上げることにより、その怒りは鎮められた。現在彼は学問の神様として敬われている。

道真にまつわるこの物語は、劇化されて 1746 年に叙事詩の人形劇となり、以来歌舞伎でも
文楽でも人気の作品として今日に至っている。

二つのジレンマ

『菅原伝授手習鑑』は悲劇的な道德上のジレンマの、深く感動的な叙事詩である。名誉、
忠誠心、及び屈辱が中心テーマで、ジレンマからの救済は、切腹と自らの子供の犠牲によ
り遂げられる。物語の核には二つの相容れない忠義がある。すなわち、^{きむらい}武士である松王丸
の第一の忠誠義務はその主君に対してのものである（そして武士として、この忠義は他の
すべての忠義に優ることが求められる）。しかし同様に考慮に入れるべき他の忠義もある。
そもそも松王丸とその兄弟は、別の主君の恩を受けて武士になったのである。問題は、松
王丸の現在の主君が、ライバルすなわち松王丸の最初の恩人を、破滅させようと凶る邪悪
な人物であるということだ。

言いかえれば、一方には制度上の忠誠義務（日本の過去にあった封建的階級社会におけ
る）があり、それと対立してもう一方に、感謝して恩に報いるという、より一般的な人間
の義務がある。

このジレンマは日本に独特のものということではない

しかしながらこのジレンマは日本に限ったものではない。ドイツのヒトラー親衛隊は「人間以下の者達」を辱めることは名誉ある高貴な義務であると教えられた。「私の名誉は忠誠にあり」はドイツのモットーだった。それは、ヒトラー総統が唱えたアーリア人（ユダヤ人でない白人種）の「超人」世界というビジョンへの忠誠だった。ファルスタッドの若いドイツ人兵士は何百万というドイツ人同様、彼らより下位に「属する」人々を乱暴に支配するのは、名誉ある義務なのであるというイデオロギーを吹き込まれていた。この命令に服従しない将校は、自分の命を危険にさらすばかりでなく、その名誉をも失うことになった。ヒトラー総統の意志に従うことが彼にとって最も名誉ある義務であり、その義務は彼の上官や政治的指導者のためだけでなく、ドイツ国民全体のためのものであった。世界全体の秩序（彼の心の中では）のためでさえあったのだ。ユダヤ人でない白人種は世界の救い主であり、若いドイツ人兵士は、その人種の優位を守り全世界のために明るい未来を確保することが最高の義務であると教えられた。

私が 2002 年 10 月に会ったクヌート・ギョーツさんは、かつてファルスタッド収容所に入れられていた（ファルスタッドは、第二次世界大戦中ナチス占領下のノルウェーで政治犯のためにドイツ軍がつくった収容所）。彼は、ある日の早朝ファルスタッドの建物の地階で若いドイツ人兵士に躓いてしまった話をしてくれた。せいぜい 19 歳であろうと思えたそのドイツ兵は、泣きながら頭を振り「僕達は狂っている！ 僕達はみんな狂っている！」と繰り返していたという。ドイツ兵は彼を見ると、自分の唇に人差し指を当て、彼が見た

ことを誰にも言うなと合図した。次の日その同じ若いドイツ兵は、仲間と同様にまた被収容者を殴っていた。

この若い兵士が、人間をより高い存在とより劣った存在に分類することが正当とされる世界の中に捉えられていたことは明らかである。彼の内面はこの外側の正当性をめぐる葛藤に苦しんでいたが、一步踏み出してそれに反対する勇気を持ち合わせていなかった。彼はその名誉体系の規則に従わなくてはならないと感じていた。昼間彼は被収容者を辱めるという「気高い」義務を遂行したが、夜には自らの行いを責めた。

Tatort (「犯罪現場」) は、1970 年以來ドイツ公共テレビの第一チャンネルで毎週日曜日の夜に放送している犯罪もののシリーズ番組であり、ドイツのテレビで警察スリラー番組の代表的なものであるが、『菅原伝授手習鑑』に似て、道徳的ジレンマを描いている (*Derrick* はドイツテレビの第二チャンネルで 1998 年まで放送されていた同様のシリーズだった)。現代のアメリカのテレビでは、警察ものの番組は「善」と「悪」を、及び「救い主」が如何に「悪」をやっつけるかを描いている。その救い主のヒロイズムは「アクション」(衝突する車、発砲、砕け散る「敵」の身体)を通して表現され、これは視聴者の関心を惹きつけるためになされるのである。もっと以前は、同様のスリラーの核にあったのは知的な難問であった。アガサ・クリスティーのエルキュール・ポワロとミス・マープル、あるいはアーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズは「悪党」を知恵でやっつけた。アガサ・クリスティーやアーサー・コナン・ドイルでは、悪党はしばしば(いつもではない

が)「きまりのもの」として描かれている。そこでは「悪」は、なぜ起こるのか説明する必要のない一種の自然現象のようにみなされている。それとは対照的に *Tatort* や *Derrick* では、悪党の背景、つまりなぜその人が悪党になったのかが中心の問題となる。たいていの場合、悪党は生まれながらの「悪」人としてではなく「良い」人なのだが、ある道徳的ジレンマゆえに「邪悪な行為」に走ってしまったのだとされる。

おそらくドイツの歴史から、警察スリラーものに対するこの特定のアプローチを理解することができるだろう。『菅原伝授手習鑑』におけると同様に、観る人を感動させる物語の核は、道徳上のジレンマによって引き起こされる情緒的苦しみである。

現代の世界で同様の道徳的ジレンマは数多く存在する。女性の性器切除はある文化的文脈において正当化される文化上の義務なのか、それとも道徳に違反する行為なのか。テロ攻撃が回避されうるときの拷問は義務なのか、それとも道徳に違反する行為なのか(「時限爆弾」議論)。こうしたジレンマは多くある。1991年まで私は臨床心理学者として(特に1984年から1991年まで中東で)働き、いわゆる名誉の殺人を含む、多くの複雑な事例に直面した。想像してほしい、ある母親があなたに近づき、娘がレイプされ、レイプ犯が娘と結婚しようとしないので、家族の名誉を守るために娘を殺さなければならないと説明する。あなたは人権擁護者として、レイプされた少女をレイプ犯と結婚させる、まして少女を殺すことなんて、屈辱を救済するのではなくて屈辱を増すだけのことだと言う。ところが母親は、あなたが彼女の文化的信条を侮辱し、彼女を見下していると考える。要するに、あ

あなたは幾重にも層を成した名誉、尊厳そして屈辱と向き合うことになる。あなたはどの立場をとるだろうか。誰の名誉や尊厳をあなたは守るだろうか。あなたはどちらの主張を使うだろうか。

ジレンマをどう解決し得るか

松王丸の場合、二つの方法で彼はジレンマを救済しようとする。まず彼は父親に勘当してくれるように頼む。家族の恩人に敬意を表さないことは「親不孝」であるから、また勘当されることで、彼は邪悪な主君に仕えるという最大の義務を「自由に」遂行することができるからである。二つ目は、自分の息子を犠牲にすることである。松王丸の邪悪な主君がライバルのわずか 8 歳の息子を殺して来いと命じたとき、松王丸は、恩人の息子の身代わりとして自分の息子が死ぬという方法で、その状況を処理するのである。息子を失った両親の、恩人に恩を返すという人間的義務を果たすために自らすすんで息子を失い、打ちひしがれる両親の悲しみと絶望は、観る者の心を深く揺さぶる。

現代においては我々には別の解決法すなわち人権がある。人権によりすべての人間に平等の尊厳が与えられる。もはや誰も、主君に服従して、邪悪な主君がもたらす道徳的ジレンマに陥られることはない。今日であれば松王丸の主君は告発されるであろうし、その家来が自らの子供を犠牲にする必要などないだろう。人権が優先するのは人間性であり、人間をより高い存在とより劣った存在に序列化した社会の中での服従は、もはや優先され

ない。人権という文脈の中では、人間はみな等しく、助けられたことへの感謝といった人間的な忠誠心に縛られるだけである。

『菅原伝授手習鑑』は、かつて日本のみならず世界の多くの地で優勢であった階級序列が人間の心を切り刻む様を、優れて描写した作品である。他の人々を道具（召使や下僕）と化す人々（エリート）の行いは、下位におかれた人々の人間性を奪うという危険を伴う。なぜなら彼らはもはや完全な人間としてではなく主人の手の中に握られた道具として使われるからである。主人は良くてせいぜい情け深いだろうが、そうでない時はどうなるか。下位におかれた人々は、完全なる人間性を奪われて、心理的かつ社会的に傷を負う。

『菅原伝授手習鑑』は階級社会がもたらす傷を深く感動的に描き出し、主人の側も家来の側もそれぞれに負い苦しむことになるそのような傷が、もはや必要でも正当でもないのだという人権の約束を前進させる作品である。

